Saku Museum News

佐久市立近代美術館ニュース

No.3

2024.3

開館40周年記念「油井コレクションとその時代」開催　―油井一二についての考察

佐久市立近代美術館 *1 の開館40年を記念し、「油井コレクションとその時代」*2 を2会期に亘って開催しました。189作品を展示し、1,937名の方にご観覧いただきました。

昭和54年、佐久市は当市出身の実業家 油井一二の収集した美術品の寄贈を受けました。当館設置に向けての動きは、ここに起因しています。記念展の企画会議で学芸員の一人から、収蔵品の根幹を形成した油井一二の企画の提案がありました。これまで収蔵品展では、作品はいつ誰によってどのような状況下でどんな意図をもって制作されたかに主眼をおいて展示していました。展覧会名称に「油井一二コレクション」等と人物名を入れたことはありましたが、構成は作品中心でした。今回はそれとは視点が異なる企画と感じました。さて、どんな展覧会になったのでしょうか。

本展は7章で構成しましたが、作品の収集時期は3つに区切ることができ、一二の収集傾向には時期毎の特徴がありました。

最初の時期は、一二が昭和6年に上京し絵画出張販売員（風呂敷画商）を始めた時から販売員を辞めた昭和40年頃までです。この時期の収集品は、出張販売のための作品の制作を依頼した作家や、取引のあった画商から入手した作品です。横山大観の《林亭の朝》（昭和42年頃画商から入手）や、武者小路実篤の作品群（昭和30年頃実篤から入手）等がこれにあたります。自分の趣向から手元に残しておきたかった作品です。

次は、一二が昭和40年に美術年鑑社を買い取りその経営を始めた頃から昭和50年頃の収集品です。同社が発行する『美術年鑑』は、日本画、洋画、彫刻、工芸、書の分野ごとに、日本の画壇で活躍している美術作家の情報を掲載した人物名鑑です。昭和50年発行の『美術年鑑』を参照しながら、この時期の収集品をみてみると、日本画では安田靫彦、堂本印象、洋画では小絲源太郎、田崎広助、彫刻の平櫛田中、北村西望、工芸の楠部弥一、山崎覚太郎等、当時、画壇で活躍していた文化勲章受章者や文化功労者の作品が揃っていることがわかります。また一二は、昭和50年代になってから書の作品の収集を始めています。『美術年鑑』発行の影響を受けた収集だと考えています。

その後、美術館設立が現実味を帯びてきた昭和50年頃以降の収集品には、当時の全国規模の公募展出品作が見られます。後藤純男《初秋》、三谷青子《遥》、吉岡堅二《翔》、大津英敏《花行路》、高橋節郎《麦中譜》、西川寧《虚其心實其腹 老子》、手島右卿《蒼海》等です。これから設置される美術館の姿を意識した収集でした。

収集品は昭和54年の寄贈分だけで600点余。本展覧会の展示数は油井一二コレクション全体のほんの一部でしたが、厳選した展示品は十分楽しんで鑑賞できるもので、同時に各時期の特徴も示すことができました。作品をコレクター考察の手段として構成した展覧会となりました。

さて最後に、一二の長男で美術年鑑社の現社長である油井一人のインタビューから、一二の人物像を表す言葉を紹介しておきます。「親父は、自分で夢に向かうストーリーを作っているのです。建設の資金作りのために企画展を考え、皆に『これだけのコレクションがあります』という安心感を与え、お披露目をすることが協力を仰ぐ前段階ということもありました。また、本を作ることで、本気度を示しました。これらの段階を念頭に置き、安心感を与えるべくストーリーを考えていきました。ものを売る手段をもとに、美術館をつくる手段とはどういうものなのか、考えていました。」*3

一二の行動は、画壇の作家や、佐久市民に伝播し、各方面の協力に繋がっていったのでしょう。当時の佐久市長 神津武士は次のように書いています。「佐久市立近代美術館建設の動機は、市内各種団体や同好の士により、美術館建設促進の会が結成され、その推進のため協力援助したこと、当市出身の東京美術年鑑社長油井一二氏から、自ら五十余年にわたり収集された美術品『油井コレクション』六百点余を、郷土の情操教育振興のために寄贈されたこと、市の中央部に位置する農林水産省長野種畜牧場（中略）の一角、十万平方メートルの敷地に、県立総合文化公園の建設が確定したこと等の諸条件が熟成してきたことである」*4

この歴史を忘れないで、館の運営にあたりたいと考えています。

（土屋 信）

*1 佐久市立近代美術館は昭和58年5月26日開館

*2「開館40周年記念 油井コレクションとその時代」展は、令和5年7月15日から11月5日まで展示替え休館をはさみ102日間に亘って開催

*3「油井一人氏 インタビュー」『開館40周年記念 油井コレクションとその時代 図録』佐久市立近代美術館、2023年

*4 神津武士「市民手づくりの佐久市立近代美術館」全国市長会編『市政第31巻第10号』全国市長会館、1982年

横山大観《林亭の朝》1930年

月替わりコレクション紹介

佐久市立近代美術館の収蔵作品（解説つき）を１ケ月限定で紹介しています。
佐久市立近代美術館のホームページでご覧ください。
https://www.city.saku.nagano.jp/museum/
←佐久市立近代美術館の非公認応援キャラクター「いちじくん」

コレクション展　レビュー

「コレクション展」では、当館が所蔵する約3,400点の作品をさまざまな切り口で紹介しています。令和5年(2023)に開催した二つのコレクション展に寄せられた観覧者の声をお届けします。

「おはなし」をつくる　物語・伝説・神話の美術

（令和5年3月11日～5月7日）

世界中のさまざまな物語や伝説、神話をテーマにした作品を紹介しました。作家達の表現を通して、知らなかった「おはなし」に出会えるだけでなく、知っている「おはなし」の意外な一面を知ることができる展覧会になりました。

神曲 *1 三枚のカンバスで描かれた作品で、迫力もあり、色彩も豊かで、非常に見ごたえがありました。（20代、男性）

七福神の祭り *2 …コミカルな顔の神様達がかわいくて好き。（20代、女性）

亀松、大原女、（獅子の）子落とし、神曲など、子どもが興味をもった絵のストーリーを説明することができた。仏教、キリスト教、ローマ神話など、色々な宗教があり、その雰囲気をすこしでも感じとれたことと思います。作者が生きていない時代の様子を想像し描いたことに感心していました。（40代、女性）

*1 深澤孝哉《ダンテの主題による神曲(習作)》1980年
*2 田澤茂《七福神の祭り》2000年

観覧者アンケートより

ゆるふわ 面白アートの世界へようこそ

（令和5年5月27日～6月25日）

「ゆるり」、「ふわり」をキーワードに、子どもから大人まで気軽に楽しめる展覧会を開催しました。本展では、ベビーカーをひいたご夫婦や小学生のグループ、デートで立ち寄ったお二人など、幅広い世代の方にお越しいただきました。

今までにないモチーフと明るさ、どんなにか気がらくになる絵で、初めて絵画が楽しいと思った。もう一度、絵にふれたくなりました。ありがとう。（70代、女性）

すきな絵とかをたくさん見つけた。（9歳以下、男性）

とてもゆるーく、ふわっと見れました。また見たいです！（20代、女性）

「絵を見ておはなし 鑑賞ツアー」（対話型鑑賞）の様子
令和5年6月17日開催

収蔵作品紹介

収蔵作品から「この１点」　岩田とも子《山宇宙望遠鏡標本》

本作は岩田が山歩きをした体験をもとに制作されました。標本箱の底板にはよく晴れた日の里山の景色が描かれ 岩田によると、空に浮かぶ円は「気持ちの良い真っ白な太陽」をイメージしているそうです。箱の中には全部で11個の不思議なオブジェがあり、それぞれに「KUTTSUITERU」（くっ付いてる）や「JIMENWO TSUKAME」（地面をつかめ）といったユニークな標本名が付けられています。これらは、山の中で出会った何気ないものから岩田が想起したイメージ、物語といえるかもしれません。岩田は、通常の標本が扱う鉱物や植物といった物体ではなく、彼女の感性を通して思い浮かべた形のないものに形を与え、それらを集めて標本にしました。それは、岩田がみつけた「山宇宙」が、その時、その場所に存在したという証拠でもあるのです。

自然物とのささやかな出会いは日常の中では気づかず通り過ぎてしまいがちです。しかし、例えば望遠鏡をのぞくようにそれらに目を向けると、そこにある素朴な発見から紡ぎ出される世界は宇宙という遥かな世界にまでつながっているかもしれない、何気ないいつもの世界にはたくさんの魅力が隠れていることを本作は教えてくれます。（由井はる奈）

岩田とも子《山宇宙望遠鏡標本》2011年

岩田とも子
1983年 神奈川県出身
2008年東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了
地面や太陽といった誰にとっても身近でありながら宇宙的なサイクルを想像させる事象に注目し制作を続けるアーティスト。自然観察・採集をワークショップに取り入れ、そこで出会った自然物に対する素朴な視点、そこからはじまる学びと表現を大切にしている。

松井如流と「古典」

松井如流(1900-1988)は、1955年に次のことばを残しています。

> 書の道は結局、自分一人がとぼとぼゆくべき道である。他人に手を引かれることなく、自分の足であゆまねばならぬ。自分の手に合つた杖も持たねばならぬ。自分の目をどこまでも信じて、自分の目を生かす道をえらんでこそ歩き甲斐があるといえよう。*1

ここからは、如流が書の道を歩む上で大切にしていた「古典」との関わりが見えてきます。

如流は、秋田県出身の書家です。15歳のときに書を学び始め、初めは『書勢』(大同書會) などの書道雑誌を購読し、知識を深めました。そして、関東大震災を契機として書の道を志し、吉田苞竹に師事しました。戦前、戦後を通して多くの展覧会に出品し、1964年に日本芸術院賞を受賞しました。その傍ら、大東文化大学教授として後進の育成に努め、西川寧と書道雑誌『書品』の編集を務めるなど、教育者、書道史研究者としても活躍しました。

如流は戦後、少ない字数で構成される作品を数多く発表し、「少字数書」の作家として注目されました。1961年に毎日書道展に少字数書部が開設されると、手島右卿とともにこれをリードする存在となり、精力的に少字数書を制作しました。右卿が《崩壊》(1957)に代表される、「象書」という文字の内容と表現の一致を図った制作を展開した一方、如流は古典をベースとして制作しました。

古典とは、一般的に古人の優れた書を指します。この「古人」の範囲は人によって捉え方が異なりますが、如流は特に隋唐以前の古典を中心に学んでいました。古典を学ぶ上で一般的な方法は、臨書です。如流は臨書を「畑地に肥料を施すことと同じであって、自己の栄養を豊富にする方法」*2だと考え、重視していました。さらに、臨書によって文字の型のみ習得するだけでは「物真似の範囲を出ることが出来ない」*3とし、そこに「現代人」としての感覚や呼吸を加えて表現するべきだと考えていました。

ここで、当館で所蔵している如流の作品2点から、古典の影響を見ていきます。

《思無邪 -論語 -》は、伸びやかな線で書かれており、ゆったりとした印象を受けます。おおらかな字形や線の太細の変化のつけ方には古典を学んだ跡が見受けられます。そして、これに潤渇の変化や運筆のリズムといった「現代人」としての呼吸が加わったことによって叙情的な雰囲気が加味され、古典に立脚しながらも独自の書風を築き上げていることが窺えます。本作品には、古朴な味わいとともに格調の高さが具わっており、如流らしい作といえます。

《大道汎兮 -老子語 -》は、隷書の作品です。書きぶりには《石門頌》などの古隷 *4の軽快で伸びやかな雰囲気が加味されており、「大道汎兮」ということばの、道が広がっていく様子とマッチしています。

如流は少字数書について「書体にしても篆隷行草楷とあるから、造形面から自分に適した書体によって書く。それをえらぶ過程も楽しいものとなる」*5と語っています。古典から篆書、隷書、行書、草書、楷書の各書体の様々な書風を身に付けていたからこそ、制作の際に、どの文字をどう書くかという選択肢が豊富にあり、楽しみを見出していたのでしょう。

このように、如流は生涯を通じて様々な古典を学び、目を養ってきました。古典を重んじてきた如流だからこそ、「自分の目」をひとつの軸として書家人生を歩んでいったのです。

(前川知里)

松井如流《思無邪 -論語 -》1969年

松井如流《大道汎兮―老子語―》1975年

*1 松井如流「自分の目」1955年『練馬草堂雑筆(書話集)』、練馬草堂雑筆(書話集) 刊行会、1986年 参照。
*2 前掲 *1に同じ。
*3 前掲 *1に同じ。
*4 隷書のうち、波磔という波のうねりのような筆勢の用筆が無いものを指す。
*5 『現代書道教室　松井如流』、筑摩書房、1973年 参照。

コラム 学芸員の仕事

「名前のない編集者からのバトン」

佐久市出身の洋画家・神津港人 (1889-1978)を調べるため、作品の資料がまとめられているカルテを開くと、一篇の手書きの年譜が入っていました。その年譜には几帳面な文字で港人の生年から没年までの出来事が詳細に書かれています。他の資料と照合したところ信頼できる内容だとわかりましたが、記名が無いので誰が作ったのかわかりません。さらに調べると、当館が開館した翌年の1984年にテーマ展示「神津港人」を開催しており、その目録に一部修正を加えたこの年譜が載っていました。年譜と当時の学芸員の筆跡が違うので、結局、原本の制作者はわからないままでしたが、カルテの中で40年近く眠っていたその年譜は、一人の郷土作家を伝えていくのだという勤勉な編集者の熱意にあふれていました。その年譜の発見は、まるでタイムカプセルを開けたような驚きでした。美術館は作品だけでなく、それに関連する資料も保管し後世に伝えていきます。それは、過去現在未来という時間の中で、美術のバトンをつないでいくようなものだと思います。名前のない編集者からのバトンを受けとめ、今、私のしている仕事もいつか、40年先の誰かにも届いたらいいなと思います。

(由井はる奈)

修復プロジェクト

令和５年度「日本画・片岡球子《富士に舞う　陵王と還城楽》を修復したい！」

佐久市立近代美術館では、2023年10月2日から12月31日の期間に、ふるさと納税型クラウドファンディングを実施しました。

作品の制作者・片岡球子(かたおか たまこ) (1905-2008) は、北海道出身の日本画家です。女子美術専門学校（現 女子美術大学）日本画科に学び、卒業後は横浜市内の小学校で勤務する傍ら制作活動を行い、戦後に入って安田靫彦(やすだ ゆきひこ)に師事しました。そして、日本芸術院会員に就任し、文化功労者となり、更には文化勲章を受章するなど、日本を代表する日本画家の一人となりました。

片岡の絵の特徴は、大胆な構図と色彩の強さにあります。郷里で、光の反射により雪が様々な色彩を放つ様子を目にしていたことで、多くの色彩が蓄積(ちくせき)されたといいます。

今回修復した作品は、舞楽をテーマとした作品で、1969年に制作されました。富士山を背景に、「陵王(りょうおう)」と「還城楽(げんじょうらく)」という異なる演目の2人の登場人物が描かれています。画面右は、竜頭の面に赤系の装束を身に着け、右手には金色の桴(ばち)を持ち左手は剣印を結んでいることから「陵王」、画面左は、朱の仮面を着け、左手には作り物の蛇を持っていることから「還城楽」だとわかります。舞の所作に漲る躍動感と装飾的に描かれている背景とが相まって、幻想的な世界を作り出しています。（前川知里）

片岡球子《富士に舞う　陵王と還城楽》1969 年

御 礼

クラウドファンディングを実施した結果、11名の方から計491,000円のご寄附をいただきました。県内外を問わずご支援を賜りましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

修復した作品は、2025年3月15日（土）～5月6日（火）の期間に展示します。

令和６年度「日本画・岩橋英遠《果樹園二題》を修復したい！」

岩橋英遠《果樹園二題　北ぐにの春》1948 年

岩橋英遠《果樹園二題　冬来る頃》1948 年

この六曲一双屏風に仕立てられた作品、図版の向かって左から《果樹園二題　北ぐにの春》・《果樹園二題　冬来る頃》は、油井一二コレクションとして佐久市に寄贈された時には「北ぐに春秋（春・晩秋）」とされていました。ところが、図版左の作品は、単独で1948年の再興第33回日本美術院展（院展）に無鑑査出品されており、その時の題名は「《北ぐにの春》〔北ぐに春秋（春）〕」*1というものでした。一方、図版右の作品は同じ年の第4回日本美術展覧会（日展）に応募して落選したため、日展の展覧会目録には載っておらず、そこで院展出品作に倣って寄贈当初の題名になったと思われます。現在当館では、現に作品の裏面に記載のある「果樹園二題…」を採用しています。

岩橋英遠(いわはし えいえん) (1903-1999)は、熊本出身の屯田兵の長男として北海道空知郡江部乙(えべおつ)村（現滝川市）に生まれ、21歳のとき上京して日本画家山内多門(やまうち たもん)に師事し、31歳で院展に初入選します。多門没後は戦後の1945年に日本美術院の安田靫彦(やすだ ゆきひこ)に入門しました。この「果樹園二題…」は1948年制作の作品ですが、翌年の院展出品作《砂丘》で奨励賞、その翌年《明治》と翌々年《眠》で院賞を受賞し、2年後の1953年、日本美術院同人に推挙されています。

英遠はこの作品について、画集 *2の図版に添えられた「画家のことば」に「写生そのままの絵です。」と述べています。このりんごの木と、遠景として江部乙の西北に連なる暑寒別(しょかんべつ)岳と思われる山並みは、英遠の他の作品（《道産子追憶之巻》*3など）にも度々登場します。それは自らを道産子と称して憚らなかった、英遠の原風景であり、それが戦後の画業の出発点にもなったと思われてなりません。この作品は描かれてから 75年の年月が過ぎ、メンテナンスの必要な時期になってきました。（小山雅比古）

*1『日本美術院百年史』8巻 1997年3月 財団法人日本美術院 p.442
*2『岩橋英遠画集』1993年1月12日 株式会社求龍堂 p.175
*3《道産子追憶之巻》(1978-82)は全長29メートルを超える英遠の代表作のひとつ

編集後記

Saku Museum News（佐久市立近代美術館ニュース）vol.3 は、佐久市立近代美術館ホームページでもお読みいただけます。学芸員の関心事を広く皆様にお伝えすることを念頭において編集しました。近代美術館は佐久地域の皆さまに寄り添った教育・研究機関としての役割を担います。掲載した記事について、お気づきの点や感想などを書面等でお寄せくださいましたら幸いです。今年度は国内の先進的な取り組みを進める美術館の視察を始めました。その知見を活かして近代美術館の将来像を描き、調査研究、教育普及に役立ててまいります。（日比野ルミ）

佐久市立近代美術館ニュース　No.3
発行日　2024 年 3 月 26 日
編集・発行　佐久市立近代美術館 油井一二記念館
〒385-0011 長野県佐久市猿久保 35-5（駒場公園内）
TEL 0267-67-1055　FAX 0267-67-1068
https://www.city.saku.nagano.jp/museum/
デザイン・印刷　キクハラインク